

第1図 志高遺跡の位置



第2図 遺跡空中写真



第3図 縄文土器精査風景

志高遺跡

はじめに 志高遺跡は、舞鶴市字志高に所在し、若狭湾に注ぐ由良川の河口から約10km上流の左岸の自然堤防上に位置する縄文時代から近世に至る京都府内有数の複合集落遺跡である。

調査は、由良川改修工事に先立って、昭和55年度から昭和58年度までを舞鶴市教育委員会が、昭和59年度から昭和61年度までを当調査研究センターが実施した。

現地調査は、由良川左岸の自然堤防上を延長約2kmを対象として試掘調査を実施し、花ノ木・岡安・舟戸・カキ安の4地区については遺構の広がりを確認したため面的に拡張した。総調査面積は、約17,000m²である。

志高遺跡の変遷 由良川は、弥生時代中期にはいくつかの分流が存在し、後期には大きなひとつの流れとなり、古墳時代前期にその流れが大きく変わる。以降、中世までその変動はあまりなく自然堤防が発達し、中世から近世にかけて再び大きな変動があり現河道が成立すると考えられる。

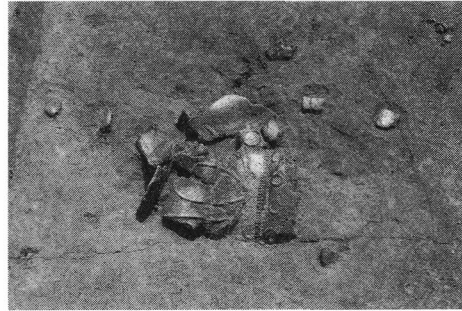
志高遺跡は、自然堤防上に位置する遺跡であることから砂の洪水層を間層として遺構・遺物が厚さ約6.5mに及ぶ堆積層内に含まれる。

縄文時代早期の遺物包含層は、地表下6.5m、標高0m付近に存在し、縄文時代

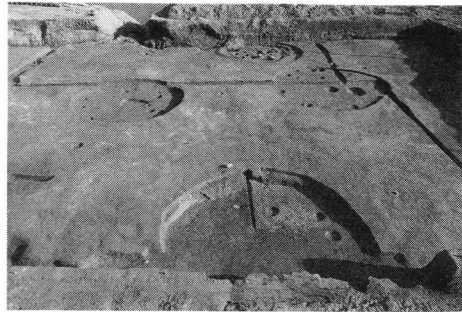
前期の遺構面や包含層は、標高1m前後に存在する。弥生時代中期の遺構面と包含層は、標高4m付近に存在し、これより上面に、古墳時代・奈良時代・平安時代の遺構面・包含層が順次堆積している。その上層には、平安時代の洪水層が堆積し、さらに中・近世の包含層と続き現地表面にいたる。

縄文時代早期末から前期末にかけては、遺構及び包含層を検出したのはごく限られた範囲であったが、竪穴式住居跡2基・炉跡6基・土坑等を検出した。遺物では、竹管文で飾られる土器群の他に、多数の石器や球状耳飾りの装飾品が出土している。

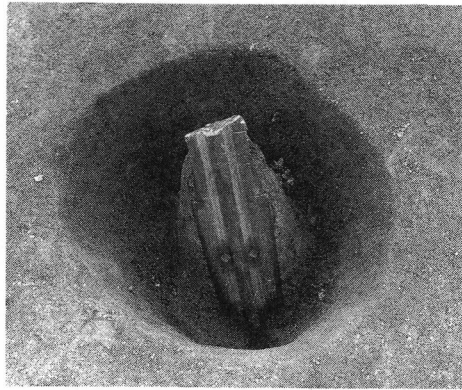
弥生時代前期では、今回の調査区には柱穴群以外に特に顕著な遺構は検出されていないが、遺物が多数出土することから、付近に居住域が存在したと思われる。中期には志高遺跡は飛躍的に発展し、その集落は総延長約500m、居住域(円形竪穴式住居跡11基)を中心に大溝を挟んで方形周溝墓群が、自然河川を挟んで方形貼り石墓群が位置する。遺物では、多数の土器の他に石器・石製品が出土した。特に石製品には、碧玉製管玉完成品・未製品・原石(剥片)・石鋸等が出土することから玉生産が行われていたことが判明した。また、竪穴式住居跡の床下の柱穴から半截された磨製石剣が埋納されたような状態で出土しているのは興味深い。弥生時代後期には、中期の大集落は分散され小規模な集落が営まれ、墓域も平地に営まれるのとは別に丘陵上にも築かれる(シゲツ墳墓群4号墓・水無月山遺



第4図 縄文土器出土状態



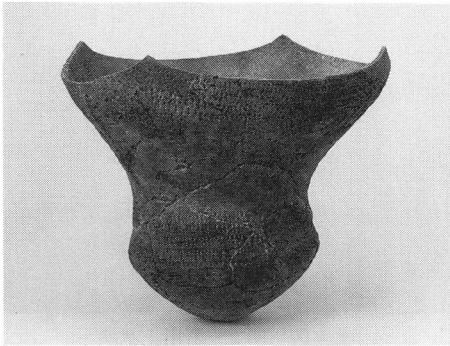
第5図 弥生時代集落跡



第6図 ピット内の有樋式石剣



第7図 古墳時代集落跡



第8図 縄文土器



第9図 縄文土器



第10図 方形貼り石墓



第11図 方形貼り石墓

跡)。

古墳時代前期では、調査地全域にわたって土坑・溝が散発的に存在し、遺物も数多く出土しているが、集落を構成する顕著な遺構は調査区にはなかった。岡安地区で前期後半の方形堅穴式住居跡2基を検出したにすぎない。

古墳時代後期では、遺構・遺物の出土が少なく、その様相は不明である。

古墳時代末から奈良時代にかけては、ほぼ全域にわたって建物跡を検出しているが、その中心は舟戸南地区にある。この地区では、飛鳥時代から奈良時代中頃にかけての方形堅穴式住居跡11基を検出し、住居の規格(多くが竈をもつ・青野型住居を含む)・方位等に計画性が認められた。奈良時代後半期には、この堅穴式住居が掘立柱建物に建て替えられる。掘立柱建物跡は20棟以上確認され、その方位や検出状況から大きく3時期に分けることができる。この建物群は、各時期とも2間×2間の総柱の倉庫棟を東側に配し、2間×3間以上の掘立柱建物を整然と配置している。

志高遺跡では平安時代以降も集落が営まれるようであるが、顕著な遺構が検出できていないためその様相は不明である。しかし、中世の土壌墓から中国南宗時代の龍泉窯青磁碗が完形で出土し、この地に有力者が居住していたことがうかがえる。

縄文時代早・前期の土器群 地表下6mから4.3mの間に縄文時代前期の遺構及び包含層を検出した。住居跡・炉跡等を検出

した遺構3面を含む13層に分かれ、出土遺物は整理箱80箱にのぼる。

由良川下流域では、桑飼下遺跡・三河宮の下遺跡で後期を主体とする集落が確認され、後期の土器様相が明確にされている。

縄文土器は、層位的にも形態的にも分類可能なことから、6時期に区分した。すなわち早期末として位置付けられる爪形文・回転縄文・条痕文土器が混在する志高縄文Ⅰ期、前期初頭羽島下層Ⅱ式に併行する志高縄文Ⅱ期、前期前葉北白川下層Ⅰ式に併行する志高縄文Ⅲ期、前期中葉北白川下層Ⅱ式に併行する志高縄文Ⅳ期、前期後葉北白川下層Ⅲ式に併行する志高縄文Ⅴ期、前期末大歳山式に併行する志高縄文Ⅵ期である。このように由良川下流域における前期土器群の様相を明確にし得た意義は大きい。

方形貼り石墓 方形周溝墓の墓域と画して、3基の方形貼り石墓を検出した。2号墓は最大規模を誇り、一辺15.5mの墳丘に幅3～4mの周溝を巡らす。貼り石は、墳丘斜面に7～8段平らな面を外側にして丁寧に貼りつめ、材質は主に花崗岩を用いている。これら貼り石墓は、墳丘上に複数の埋葬施設をもち、方形周溝墓とはその様相が異なる。

畿内や東海における多埋葬の方形周溝墓や、山陰における四隅突出墓の初期形態等を考えあわせ、丹後地域の墓制を知るうえで貴重な資料である。

(水谷寿克=当センター)



第12図 集石遺構の実測



第13図 弥生土器



第14図 弥生土器